
DETECTIVE物語

龍恋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DETECTIVE 物語

【Nコード】

N7945A

【作者名】

龍恋

【あらすじ】

新一&蘭・平次&和葉の4人の物語
4人
がそれぞれいろんな思いが広がる…

第1章：新一の日常

「新一！ 学校遅れるよぉー！」

朝からうつせし声が聞こえてくる。

「おいおい。何処が遅れるんだよ。まだ8時前だぜ！学校が何時から始まると思ってるんだよー！」

「今日は空手の朝練があるの。いーから早く支度してよねッ！！！」

俺の名前は“工藤新一”

高校生探偵だ。

そして朝からギャーギャーうるさいやつが、幼馴染みの“毛利蘭”

今日もいつもと同じように2人で登校する。

周りのやつらは、俺達のことを“恋人” と思ってるみたいだ。

「今日も暑いなあ。誰かさんらのせいで。朝から夫婦で登校なんて、蘭やるうーっ！！！」

出やがった。。。

「夫婦ぢやないっていつてるぢやない。園子。」

いつも蘭と一緒にいる園子。園子の冷やかに、必死に『違う』といいはる蘭。

結構俺はつらかったりする。『そこまで否定しなくてもいいじゃないか。』とか思いつつ、俺は教室に向かった。

第2章：蘭の悩み

今日もいつもみたいに、新一を迎えに行く。

私にとつてそれはとても嬉しいこと。新一はどう思っているんだろう？？？

学校に着くといつもみたいに園子に冷やかされる。

私は『違う』って言ってるけど、ホントはちよつと嬉しい。

新一は皆と一緒に教室に行き、私は園子と一緒に体育館に向かった。

「ねえ、蘭。蘭ってホントは工藤君とどうなの？」

「あるわけないじゃない。ただの幼馴染み。新一だってそう皆にいつてるみたいだし。」

「でもさあ、工藤君モテるんだから早くしないと誰かにもってかれちゃうよ。」

「なんでもないって。いーんぢゃない。新一が好きなんだつたら。」

そーいつて私わ部活にいった。『私ってほんと素直ぢゃないなあ。』

『そんなことを思いながら。』

放課後

部活中、私はずっと上の空だった。園子に言われた事がずっと気に

なつてた。

「工藤君モテるんだから、早くしないと誰かにもってかれちゃうよ。」

確かに新一はモテる。

運動もできて、頭もよくて、なおかつ有名な名探偵。世間の女の子がほっとくわけがない。

そんなことをずっと考えていたとき……

「毛利さんッ!!」

“ドンッ”

私はその場に倒れた。試合中に余計なことを考えていたため、先輩の下段が足に直撃したのだ。

モロに受けたため、とてつもない激痛がはしった。

「ちよっ、蘭大丈夫??」

練習を見ていた園子が心配そうにみている。

「大丈夫よ。ちよっと倒れただけ。」

「保健室行こ!!」

園子や空手部の人に支えてもらい、私は保健室にいった。

第3章：新一の心配

ブルブル

学校からかえろうとした時、携帯のバイブがなった。メールだ。誰からかと思いひらいてみると…園子からだ。

【工藤君。早く保健室に来て。蘭が大変なの。】

何事かと思い、俺は久しぶりにダッシュした。

俺は保健室のドアを乱暴に開けた。

「蘭ッ！！」

「どーしたの新一??そんなに息きらして。」

「あれ??」

蘭は不思議そうに俺を見ていた。

その横で、不気味な笑みを浮かべているヤツがいた。園子だ。

やられた…。

「どーしたの??」

肩を落としている俺に蘭がいった。

『くそつ。園子のやつあとで覚えてろ。』

部活で怪我したことをいい、園子は帰っていった。

保健室で2人きり。なんとなく沈黙が続く。その空気に耐えられなくて、蘭に話かけた。

「蘭、大丈夫なのか??」

「大丈夫。ちょっと痛むだけ。帰ろっか。」

と蘭は立ち上がったが、すぐにバランスを崩した。

「大丈夫ぢやねえ、ぢやねえか。ほらッ。乗れ!!」

「いいよ。私重いし、恥ずかしいし。」

「バ、口オ。そんなこといつてる場合ぢやねえ、だろ!!」

俺は蘭をおんぶして家におくことにした。

帰り道蘭が

「ねえ、新一、昔もよくおんぶしてくれたよねえ。」

「あ、おめえはよく怪我してたからなあ。」

「私が怪我するたんびに新一、走ってきてくれたよねえ。今日も息きらして来てくれし。すっごく嬉しかったよ。」

「何らしくねえ、こといつてんだ。」

毛利のおっちゃんがいなくてよかった。
会ったらぜってえなんか言われる。

家に着き、蘭の部屋のソファに座らせた。

「ありがと。新一。」

「おう。気にすんな。また何かあったら、すぐいつてやるよ。ゆっくり休めよ。ぢゃーな。」

蘭の家を後にして俺は家に帰った。

第4章：平次の日常

「平次、はよ起きんかいどあほ。」

「朝からじゃかゝしいぢやお前は。ちゃんと起きてるがな。毎朝毎朝人ん家にズカズカはいつてきよつて。」

「なんゆーてんねん。あんたがいくら呼んでも出てきいひんからきたつてん。ちよつとは感謝しゝや。」

「なんやねんその態度。もつと女らしゆなれ。あゝそや。工藤んこのねえちゃんもつとみならえ。」

「工藤君とこのつて蘭ちゃん?! 蘭ちゃんわホンマええ子やなあゝ。つてそれどない意味やねん。」

「そのまんまの意味やあゝ。どあほ。」

「あんたらほんまなかええなあゝ。でもはよ支度せな学校遅れるで2人とも。」

「「うわっ。ほんまや。」」

「ほなオカン。俺ら学校行ってくるわ。和葉はよせい。」

「あんたのせいやん。なんやえらそつに。」

キンコンカンコン
ギリギリセーフ。

俺と和葉はそれぞれ席につく。いつもこんな感じやわ。

俺の名前は“服部平次”

浪速の高校生探偵や。ほんで、さっき言い合いしとつたんが幼馴染みの“遠山和葉”ほんまやかましい女やわ。

そーいやあ昨日工藤から電話があつたんや。

なんやねえちゃんか部活中怪我したらしいねん。

工藤のやつえらい心配しとつたわ。

あいつはほんま、ねえちゃんのことになると必死やからなあ。

今度また、からかいにいったらなあかんわ。笑笑工藤のやつ、ねえ

ちゃんのことよっぽど好きなんやろなあ。

これは1つ協力したらなあかんわ。

第5章：和葉の悩み

今日もいつもどおり平次ん家や。

「平次くはよいくでえ。」

呼んでも全然出てきいひん。まあいつものことやからなれてんやけど。

でも、毎朝こんな言い合いしてたらほんま疲れるで。

ほんま平次のやつ腹立つわあ。

人の顔さえみればグチグチと。工藤君をもっと見習えっちゅーねん。

そーいやあ昨日蘭ちゃんから電話あったなあ。

昨日の夜

「もしもし和葉ちゃん。元気してる??」

「もしもし蘭ちゃん。めっちゃ元気やで。蘭ちゃんこそ元気なん?」

「うん。元気だよ。」

つといたあと蘭わ部活のこと、帰り道のことなど今日あったことを話してくれた。

「なんや。大丈夫なん??てか工藤君とええ感じやなあ。ほんま羨ましいわあ。」

「うん。何か今日はちょっと嬉しかったんだあ。和葉ちゃんこそどうなの？」

「うちらわ相変わらずやわ。ほんま平次がなん考えとるんかわからへんわ。」

「服部君って何か言葉たりないもんねえ。新一もだけど。」

「ほんまやわ。」

と、くだらん話をしたけど、何か蘭ちゃん元気ないよな気がしてんなあ。

ほんで、今度の冬休み、私と平次と蘭ちゃん・工藤君でどこか行こうってことになったんや。

放課後

平次と一緒に帰ってた時、蘭ちゃんが言ってたこと伝えてん。そしたら、

「ええなあ。何か楽しそうやんけ。」

やて。えらいうれしそうやわ。そのこと蘭ちゃんに伝えたら、工藤君もOKやったらしい。

冬休みがめっちゃ楽しみやわ。

第6章：新一＆平次

冬休みがきた

蘭の足もすっかり治った。

今日は俺ん家に、服部・和葉ちゃんがくる日だ。

冬休み前4人で話し合った結果、ハワイに行くことになった。

1週間ほど宿泊する。クリスマスはもちろん、年もハワイであかす予定だ。

蘭はすでに俺ん家にいる。服部らがくるのがまちどうしいみたいで、部屋を行ったり来たりしている。

「おい蘭。じつとしてろ。もうじき来るからよ。」

「だって。」

その時、インターホンがなった。

蘭は急いで玄関に向かう。

「蘭ちゃん久しぶり〜。」

「よ〜ねえちゃん。相変わらず元気やなあ。」

「和葉ちゃん・服部君いらっしやい。奥で新一も待ってるからあ〜。」

「ほなあがらしてもらっでえ〜。」

玄関から騒がしい声が聞こえる。
服部達が来たみたいだ。

「よー工藤。」

「おー。遅かったな。」

「和葉が準備にえらい時間かかってなあー。」

「まあー。今日は俺ん家泊まるわけだし、2階に部屋準備してるから、荷物置いてこいよ。」

「おーきに。世話になるで。」

しばらくして、荷物を置いた平次が降りてきた。

「そーいやあ工藤。ねえちゃんとは進展あったんか？」

「あー？何にもねーよ。お前こそ和葉ちゃんがとほどうなんだよ？
？つーかお前好きな人いるだろ？？」

「なんゆーてんねん。なわけあるかあー。」

「そーとー焦ってやがる。」

「だいたい、なんで俺が和葉のこと好きにならなあかんねん。」

ムキになるところが更にあやしい。

「つーか俺和葉ちゃんが好きなんだろなんて、いってねーぞ。」

「工藤お前釜かけよつたな。」

「何いつてんだよ。お前が一人で勝手にしゃべったんぢやねーか。」

服部はほんま単純なやつだ。そんなお前に単純バカの称号を与えてやるよ。笑

「お前こそねえちゃんのこと好きなんやろ？ほんまお前はねえちゃんのこととなると、必死やからなあ。」

「うっせー。お前だって和葉ちゃんのことになると必死だろが？？お互い様だ。」

第7章：蘭&和葉

和葉も部屋に荷物を置きに行く。

蘭も一緒についていき、部屋で話始めた。

「来るの遅かったねえ。」

「ごめんなあ。準備にえらい時間かかってん。1週間も泊まるわけやし、服一杯もってきてん。蘭ちゃんも一杯もってくんやる?？」

「私はむこうで買おうと思ってるの。私が荷物つめてるときに新一が【お前そんなに持ってたで?」すんだよ。邪魔なだけだ。むこうで買えばいいだろ。】ってゆーから。」

「そーなんやあ。平次なんか、【はよせい!!】の一点張り。ほんまやかましいわあ。」

そんなふう言ってるけど、和葉ちゃんすごく嬉しそう。服部君の話をしていると顔がにやける時があるの。『ホントに服部君のことが好きなんだなあ』って思い、「クスッ」って笑うと

「何蘭ちゃん笑ってんねん??」

「和葉ちゃんってホントに服部君のことが大好きなんだねえ。」

「なっなんゆーてんねん。」

顔真っ赤。和葉ちゃん可愛い。笑

「蘭ちゃん…絶対平次には内緒やで。」

やっぱ好きなんだ。

「わかってるよ。実は私も新一のこと大好きなんだあ〜。」

「ほんまやで。てかやっぱ蘭ちゃん工藤君のこと…バレバレやで。」

お互い顔を真っ赤にし、クスクス笑いあっていた。

「お〜い。そろそろメシ食いにいくでえ〜」

服部君の声がし、2人で部屋をあとにした。
新一と服部君は玄関で待っていた。

4人で、近くのレストランに行き、明日の朝がはやいため今日は早めに寝た。

『明日が楽しみだなあ〜』

第8章：4人の心内

「和葉はよ走らんかい。遅れるで。」

「走ってるがな。だいたいあんたが寝坊すんのが悪いんちゃう。」

「しゃーないやんけ。昨日あんま眠れんかったんやから。」

「そんなんしらんがな。」

平次の心内

昨日あんま眠れんかったんは和葉、お前のせいや。

つか工藤が、好きやなんやかんやゆーから、意識し過ぎたわ。
だいたい和葉と同じ部屋ってどーゆーことやねん。

工藤のどあほ。。。

和葉の心内

平次と同じ部屋やなんてほんまびつくりしたわあ。何や昨日の平次えらい可笑しかったなあ。

語尾がカタコトやったし。なんや可愛かったわ。

工藤君に感謝せなあかんわあ。

「服部君たち遅いね。間に合うかな。」

「大丈夫なんじゃねえ。」

「てか2人をわざわざ同じ部屋にしなくてもよかったんじゃない？
？2人とも目が点になってたよ。」

「そーかあ。あの2人はそーとー奥手だからなあ。2人きりにしたら何かあるぢやねえーかと思ったけど、あの様子ぢやなんもなかったみたいだな。服部は素直ぢやねえからな。」

新一の心内

素直ぢやねえのは俺の方がもなえー。

俺も人のこと言えねーな。ハワイの別荘の部屋、蘭と一緒にいいなあー。

まあ無理だろーし、そんなこと口が割けても言えねーよ。

蘭の心内

和葉ちゃんいいなあー。

好きな人と同じ部屋なんて。

ハワイの別荘の部屋、和葉ちゃんに頼んで新一と一緒にしてもらお
うかなあー。まあそんなこと絶対言えないけど。

「2人で何難しそうな顔してんねん。」

「「えつ。」」

服部たちが間に合ったみたいだ。

「ギリギリぢやね〜か。」

「よかった。間に合って。」

「ごめんね〜蘭ちゃん・工藤君。」

ハワイ行きの飛行機のなかでずっと4人で話していた。

第9章：運命の部屋割り（笑）

ハワイに到着

「冬のハワイってのも結構ええもんやなあ。」

「ほんまやなあ。海がきれいやわあ。」

「ほんとだねえ。」

「おい。どうでもいいから、はやく別荘に行くぞ。」

工藤のやつ気分ぶち壊しや。

ほんま昔から協調性がないんやから。

なんなん、工藤君。

人が浸ってたのに。自分勝手やなあ。」

新一のばか。どーでも良くないし。後で回し蹴りの刑にしてやる。

3人の冷たい目を気にせず、1人でタクシーをひろっていた。タクシーの中…新一以外の3人がぶつぶつと何か言っている。新一に呪いでもかけるように……。笑

別荘に到着

「ここが工藤君家の別荘なん?? 広いなあ。」

「ほんまぎょーさん金かけとるで。」

「親父らの仕事上、世界各国に家が必要なんだよ。そこで客招いてパーティーとかするからな。狭いとダメみたいだぜ。」

新一の別荘は、玄関を入ると広いダンスホールがあり、その奥には階段、電気はもちろんシャンデリア。

高校生が使うにはなんとももったいないくらいだ。

「ぢゃあ部屋に荷物置いてメシでも食いにいこかあ。部屋割りどないするかあ??」

..... 新一はもちろん蘭と一緒に.....

蘭はもちろん新一と..... 和葉は平次と..... 平次は.....
しばらく沈黙が.....

この空気に耐えられなくなり、最初に言葉を発したのは... 蘭だ。

「こつ、ここは思いきつてクジにしちゃう??」

蘭は必死に言葉をつなげた。

「そつ、そつやな。一番公平やし、面白そつやもんな。なあ和葉...」

「うつ、うん。ええんちゃう。なあ工藤君。」

「おつ、おつ。」

4人とも手に汗を握って、神経を目の前の割りばし集中させた。
それぞれが自分の希望どおりになることを祈って…。

「ぢゃあせーので引くよ。……………せーのッ！……！」

蘭の声と共にいつせいに引いた。

一番と二番・三番と四番が同じ部屋。

結果は……

「私3番。」

「うちは2番やわ。」

蘭と和葉ちゃんが違う部屋。

つと言うことは、俺が蘭と一緒にの部屋。ラッキー

和葉とねえちゃんが違う部屋。

ちゅーことは俺が和葉と同じ部屋で決まりやな。

新一・平次はほぼ同時に番号をみた。

「「えッ。」」

「どないしたん。2人とも固まったりして。」

蘭と和葉は不思議そうに新一たちを見ている。

「新一、何番だったの??」

「平次何番やの??」

「ちよい工藤。」

「服部、どーすんだよ。」

新一と服部は蘭たちに背を向け、コソコソと話始めた。

「工藤。くじ交換すんで。お前に和葉の面倒は見れへんやろ。」

「あたりめーだ。蘭をお前みたいなやつと一緒にさせれるかよ。」

「何や、それ。どーゆー意味やコラア。」

「そーゆー意味だよ。」

2人は言い合いを始めてしまった。

蘭と和葉は意味がわからず、とりやえず2人を止める。
先に服部が動いた。

「ほなねえちゃん、部屋行くで。」

「私服部君と？」

服部は蘭の腕をつかんで、強引にその場を離れた。

「えっ、これどないなってるん？工藤君。」

「まあ見ての通りだよ。俺らもとりやえず荷物置きに行こ。和葉ちゃん。」

平次と蘭・新一と和葉に別れて皆その場を後にした。

『服部の野郎、蘭にさわってんぢやねーよ。』

『工藤のあほんだらあ。和葉になんかあつたら承知せえ変からな。』

『『何がどーなったのよ。』』

と思う和葉と蘭でした。

第10章：新一の気持ち

「なあねえちゃん。このカニめっちゃ上手いで。食ってみい」

「あ…ありがとう。」

『何なんだよ。服部のヤロー。蘭にベタベタしやがって。あーイライラする。』

俺はムシヤクシヤした気持ちで黙ってメシを食べていた。

さっきの部屋割りから、服部は蘭にベツタリだ。

和葉ちゃんそっちのけだ。和葉ちゃんの顔…めっちゃこえーよ。

服部をずっと睨みつけてる。まるで…犯罪者の殺意のある目だ。

服部…今日殺されちまうんじゃないか。

ちよつと同情するぜ。

でも俺の大事な蘭に手出したら、俺が殺してやる。

俺は素直になれるよーなやつじゃない。

蘭のことどんなに好きか、自分でもわからねえ。

たけど…誰にもとられたくねえんだ。

生まれてからずっと側にいた。

物心ついた時からずっと一緒にいて、誰よりもそばにいたつもりだ。

でも蘭は俺のことどー思ってたんだろ。

俺のただの片想いなんだろうか。

知りたいな。蘭の気持ちを…。

いけねえ、つい一人の世界にはいつちまったぜ。

「あれっ？蘭は??」

「蘭ちゃんはお手洗に行ったみたいやで。」

「なんや工藤。自分の女がおらんったことも気づかへんのんか。ほんま、ぬけとるの。」

「あん？服部、いいかげんにしねとまぢでキレるぜ。」

2人で睨み合っていた。

「ちょっといいかげんにしいや。平次、工藤君も。」

「どーしたの??」

蘭が帰ってきた。

「お、ねえちゃんまちよったで。」

俺はその言葉にキレて…

“バンッ”

その音とともに、椅子を倒し店をでた。

蘭は目を丸くしていた。

何がおきたのか、なぜ新一が起こってでていったのか…状況が把握

できない。

「平次、あんたなにしてんねん。」

「なにがや。ただねえちゃん呼んだだけやないか。」

「工藤君に謝り。」

「知らんがな。工藤が勝手にキレたんやないか。なんやしらけたな。帰ろうか。」

「し…新一追いかけなきゃ。」

蘭は泣いている。

「そ…やな。はよ行こ。」

蘭と和葉が店を出ようとするのを、平次がせいした。

「なんで止めるん?？」

「あほ…夜のハワイは危ないんや。工藤は大丈夫や。もしかしたら、別荘かえってるかもしれへん。そやからとりやえず帰るで。」

平次の言葉で蘭と和葉は帰ることにした。

くそつ。服部ヤロー。

“ボコッ”

「うわー。いてっ。何すんだよ。ヤメろ……」

第11章：蘭の心配

翌朝

「工藤君：帰ってこんかったね。」

「ほんま工藤のやつ、いいかげん機嫌なおせつちゅーねん。」

私は昨日一睡もできなかった。

新一が店を出てった理由は、和葉ちゃんから聞いたの。

昨日、私は服部君に話しかけられていた時実は、新一方見てたんだよね。

新一が服部君に妬いて、

『蘭に触んな』って言ってほしかったの。

あんなことになるなら、私から新一のところに行けばよかったなあ。

3人とも黙っていた。

服部君は昨日和葉ちゃんに怒られたみたい。

しばらくして、服部君がテレビをつけた。

『.....』

“ガタッ”

服部君が急に立ち上がったの。

「和葉、ねえちゃんはや行くで。」

「「えつ。」」

テレビで何か言っていたみたいだけど、英語でわからなかった。
服部君は凄く険しい顔をしている。

「何があつたの??」

「ええからはよ準備せい。」

私と和葉ちゃんは言われるがままに準備をし、服部君が呼んでくれたタクシーである病院にむかったの。

病院に到着

服部君が受付の人と話、ある個室に向かったの。

ドアを開けると、スーツを着て怖い顔をした人達がいた。
ベットでは誰か寝ている…

「えつ……」

私たち3人はベットにかけよった。

そこで寝ていたのは…
新だったの。

「新一：どうしたの？何があつたの？新一ー！！」
「工藤君！！！」

服部君はスーツ姿の人たちとなにか話している。
しばらく話した後、その人たちは病室をでていった。

服部君が私達に説明してくれたの。

さっきの人たちは刑事さん。新一は昨日の帰り道で何者かに、殴られ病院に運ばれたみたい。

「すまんかった。俺のせいや。あん時追いかけてつたらこないな事にならんかったかもしれへん。」

「ほんまやで、平次。あんたが工藤君からかったりせんかったら、今ごろ皆で楽しい時間過ごしてたんて。」

和葉ちゃんと服部君が何か話をしているけど、私には聞こえてなかったの。

新一のことが心配でたまらなかった。

私が新一の横で座って泣いていると、誰かが頭を撫でてくれた。

私は驚いて顔をあげると、
「また泣いてんのか？」

新一だった。目が覚めたみたい。
私はとっさに新一に抱きついたの。
新一はずっと私の頭をなでてくれた。

「私先生呼んでくるわあ。ほら平次いくで!!」
「おっおう。」

「蘭。もう泣くな。」

「バカ。ほんとに心配したんだからね。」

「ごめんな。もう大丈夫だから。」

新一は少しつかれているみたいだったけど、いつもの無邪気な顔で話してくれたの。

しばらくして、和葉ちゃんたちが医師をつれてきてくれて、
「しばらく安静にしていたら、すぐよくなりますよ。」
といい出ていったの。
もちろん新一に訳してもらったんだけど。。

新一が無事でほんとによかったあ。

第12章：病院の庭で

平次に言われある病院の病室に3人で向かってん。

そこには工藤君がケガしたみたいで、寝とった。

蘭ちゃんは工藤君にかけよって、あたしと平次が話てる時工藤君が目覚ましたんや。

あたしはすぐ平次と一緒に医師を呼びにいったんや。

「工藤君大丈夫なんやれかあ。」

「あいつは東の高校生探偵やぞ。大丈夫に決まっとるがな。」

そんなちよつと憎たらしいこと言う平次の顔は、ほんま“ホッ”とした顔やったわ。

先生を連れて病室に戻ってみると、蘭ちゃんはほんとに嬉しそうに泣いてたんや。

ほんまよかったなあ。

あたしと平次は、蘭ちゃんと工藤君を2人にしてあげようと思って、病室をでて、病院の庭のベンチに座った。

「工藤君があないな事になるなんて思わへんかったわ。」

「工藤があないなことになったんわ、俺のせいや。なんとしても犯人捕まえたるわ。」

「あんたよく反省しいやあ。あたしをほつたらかして、工藤君の蘭ちゃんにちよつかいかけるんがあかんのや。」

「なんゆうつんねん。だいたい工藤も悪いんで。」

「なんで?? あたしからしたら全部平次が悪いように見えんねんけど。部屋割りのクジの時何があったん?」

平次はちよつと困った顔したんや。
やけど顔赤くして話してくれたんや。

「あの部屋割りん時、和葉とねえちゃんが別々の部屋になったから俺は和葉と同じ部屋や思ってた。せやけどクジ引いたら、俺はねえちゃんと、工藤は和葉とやったんや。そやから工藤とクジ交換しよとしたんや。そやのにあいつがいらんことゆうてきたから、ねえちゃん連れて部屋にいったんや。」

つと一気に説明してくれた。

あたしはずっと気になってたことがあったんや。

「それで……蘭ちゃんとは………部屋でなんかあったん？」

「あほかあゝ。何ぬかしとんねん。人の女に手だすかい。そんなことしたら、土藤にもお前にも何されるかわからへんわ。」

「ほんまになんもないねんなあゝ？」

あたしは再度聞いたんや。

「何もあらへん。仏さんに誓うわ。ねえちゃんはベツト。俺はソフアゝ。」

よかったあゝ。

蘭ちゃん可愛いからなあ。

平次が蘭ちゃんになんもせえへんか心配やつたんや。
つてゆーのは嘘で、大好きな平次があたし以外の人と何かあったりするのが怖かったねん。

こんなこと平次には言えんわあゝ。

「お前何黙ってニヤニヤしてんねん。ほんま変な女やのおゝ。」

人がせつかくあんだのこと好きやゆーてんのに、
『まあ口にはしてへんけど苦笑』
なんやねんこいつ。

「誰が変な女や。」

あたしはイライラして、立ち去ろうとしてんだけど、平次に手捕まれてしまったんや。

「ちょくまでえや。まだ話終わってへんがな。」

あたしはとりあえず、またベンチに座ったんや。

「話ってなによ。」

あたしが怒った口調でゆーと、平次はいきなり真剣な顔したんや。あたしはちょっとびびったんやけど、睨んだったんや。

「…………おまえこそ工藤と何もなかったんか？」

「えっ？」

あたしにとつては以外な質問やったから、正直焦ったわ。

「なっ…なんもないに決まってるやん。」

「ほんまか？」

平次はあたしと同じように再度聞いてきたんや。

「ほんまやて。」

「ぢやあなんでそんな焦ってんねん。」

「あんたか急に变なことゆーからやん。」

「なにがや。 氣になつてたこと聞いただけやんけ。」

平次もあたしと一緒に氣になつてたんやあ。

なんやちよつと嬉しいなあゝ。

あたしが“フフっ”って笑うと

「さっきは怒つとつたおもつたら 今度は笑うんかい。忙しい女や
のおゝ。」

やからまたいつもの言い合いが始まつてしもたわ。

まあなんやかんやゆーても やっぱ平次が好きやわあゝ。

第13章：明日への誓い

その次の日の次の日、俺は退院した。

蘭はずっと病院で俺に付きそってくれた。

ほんとに迷惑をかけてしまった。

このお返しはいつかしようと心に決めた。

「新一、ほんとにもう大丈夫なの？」

「あゝもう大丈夫だ。心配かけてごめんな。」

「おい工藤。俺らにはなんもお礼なしか？」

そーいやあ、こいつもいたんだっけ。

「…ありがとな」

言いたかねえけど、一応言っというてやるよ。

「そーいやあゝ服部犯人のことなんだけだよ。」

「あゝ今ごろぎょうさんの刑事に囲まれとんちやうか？」

「ぢゃあ…」

「俺がお前の代わりに捕まえたったわ。感謝しいゝやあ。」

何か言い方むかつくけど、一応感謝してやるよ。

俺ら4人は、買い物に行き、レストランで食事をすませ、別荘に帰った。

結局俺が別荘で寝るのは今日が初めてだ。

「ほな、和葉部屋行くで。」

「えっ。」

服部が和葉ちゃんを誘ってやがる。

なにがあつたんだ…。

「工藤、お前は退院したばかりなんやから、ねえちゃんに看病してもらえ。和葉なんぞに看病されたら、余計に体悪うなるぞ。」

「ちょ…平次何やねん、その言い方。」

和葉ちゃんと服部が言い合いしながら部屋に入っていった。

俺は“チラッ”と蘭の方を見た。
すると蘭と目があつた。

俺と蘭は少し微笑んで、部屋にいった。

俺の荷物と蘭の荷物は既に、部屋にあった。

『服部や和葉ちゃんに感謝だな。今日3回目の』
っと思いつつ、蘭に風呂に入るように言った。

俺も後から入り、風呂から出てみると、蘭はベッドの上でスヤスヤと寝ていた。

俺はその寝顔を見て、思わず息を飲んだ。

世の中には、こんなに可愛い寝顔をする人がいるんだと思った。
いや。蘭だからかそう見えたんだ。

俺は蘭のオデコに優しくキスをした。

そして俺も眠りについた。『明日のクリスマスを最高のクリスマスにしてやるっ。』と思いつつ…。

平次と和葉の部屋

「蘭ちゃんと工藤君、今どーなってるやろ。」

「さあ、なあ。まあ上手くやってんのとちゃうか。」
「なあ平次。」

「何や?」

「明日のクリスマスは2人でどっかいかへん?」

「何や。そんなことかいな。別にええで。工藤らも2人の方がええやろゝからな。」

「ほんまに。ぢゃあ明日はゝ　　に行つてえゝ　それからゝ……………」

勝手に一人で計画立て始めたわ。

まあえつか。和葉の行きたいとこやつたらゝどこでもええわあゝ。

『明日のクリスマス、俺は勝負をかけよかのおゝ。』　　と心に決めた…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7945a/>

DETECTIVE物語

2010年10月16日08時24分発行